
ククルカン

櫻澤さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ククルカン

【Nコード】

N8332R

【作者名】

櫻澤さくら

【あらすじ】

アフガニスタンの泥沼の戦場に駆り出された傭兵がいた。通称エレーネ。かの者と合流し作戦を遂行せよ。それが傭兵のジョスリンとアメリカ合衆国が囲う「火の鳥」と呼ばれる傭兵との出会いだった……。【名前のない子供】シリーズはこちら。↓<http://ncode.syosetu.com/s0611a/>

パチパチと音があがった。

炎が渦巻く音だ。

腕の中で眠る少女が毛布の中でもぞもぞと寝返りを打った。

小さな体は充分な休息を必要とする。

敵に回せば恐ろしいが、味方にすればこれほど頼もしい傭兵はいない。

少女は小さくのどの奥で声を上げた。

「エレーネ、目が覚めたか？」

「…その名前は好きじゃない」

小さな体がむくりと起き上がる。

「じゃあ、他になんて呼べばいいんだ」

彼の言葉に少女は軽く頭を振った。

頭がまだ冷め切っていないらしい。

小さな彼女の体にあう戦闘服などない。それゆえに、彼女は常に普通の服で戦場に赴く。

時には、幼稚園児だと罵倒されることもままあるが、少女はそれを気にしたことはなかった。どちらにしたところで、彼女が戦場で認められるためには実力行使しか存在しないのだ。

「エレーネでいいわよ」

ドイツのチロル風のドレスを着た少女は、逞しい腕に抱き寄せられてかすかに眉間を寄せた。

「もう少し寝ている」

「昨日も言われた…」

むつつりとつぶやいた彼女に、男は眉を引き上げる。

「…ん？」

「幼稚園児の遠足じゃないんだって」

「…気にすることもないと思うが」

彼女をよく知らない者がいればそう思うだろう。

ふくらんだ袖の黒いブラウス。尚、なにかを言いつのろうとする彼女に、大男は両目をその大きな手のひらでそっと塞いだ。

「休めと言っている」

「…わかったわよ」

子供連れの兵士にでも見えたかも知れない。

もっとも彼はかなり特殊な立場にあり、フリーランスと言っても良いだろう。

彼は彼女の護衛である。

少女を雇ったのは、タリバンに抵抗する組織の一派だ。

他にも今回の襲撃作戦のために雇われた傭兵は多くいたが、その中でもチロルドレスを着た少女と少女を連れた男は異質な存在だった。

「よう、子連れ狼」

後ろからかけられた声に少女を抱きしめる男は首を回した。

「静かにしてくれ、彼女の目が覚める」

彼女がより多くの休息が必要な体であることは、男、ジョージは知っている。

唇に人差し指を当てた彼はそっと腕の中で眠る少女を見下ろした。巻き毛のブロンドを左右の側頭部でツインテールにした少女。

「どんな重要人物なんだ？」

屈強な兵士が守らなければならないような重要人物にはとても見えない。

「だから、静かにしてくれと言っている」

声を潜めた男は、彼女の体を抱いて毛布をかけ直した。

「…ジョージ、誰かいるの…？」

眠そうに目をこする少女に、男は唇を重ねた。

舌を差し入れ、彼女の体温を奪わないように全身で抱き直す。

眠りの縁から、深い眠りの深淵に落ちていく少女の様子に彼はほっと安堵のため息をついた。

「話なら後にしてくれ」

ぼそりとつぶやいてジョージ・リートは自分も目を閉じた。

戦場では休息は最大にとれるだけ取りたい。

エレーネと呼ばれる少女傭兵を伴っているならばなおさらだ。

彼女の体力は、成人男性のそれと比較にならないほど低い。少女は戦場で彼女を守る誰かがいないときはほとんど眠らない。

眠っていたとしても、最小限に消耗を抑えているだけだ。

安心して眠って体力を再生する眠りとは訳が違う。

「まるで恋人みたいな扱いだな…」

小さくぼそりとつぶやいた男は下卑た笑いを見せたが、ジョージは気がつかない振りをした。

彼女が、ジョージの恋人だなどという話を聞いた日には烈火のごとく怒り狂うことは目に見えている。

「彼女の戦い方を見れば、誰だってこの子の重要性はいやでもわかるさ」

だから、守るのだ。

戦闘のない時間帯は、自分が。

守らなければならない。

「この子は、特別だ」

目を覚ました彼女は相変わらず彼の腕の中だった。

「目が覚めたか」

「…わたし」

「…頭痛はとれたか？」

「うん…」

額に手を当てた少女は頭痛がすっかり抜けていることに気がついて首をかしげた。

そういえば、昨夜の戦闘でパイロキネシスを使いすぎたのだ。

「…ところで、それは？」

彼の後ろにいる白人男に視線を放る。

「お仲間らしい」

「ふうん」

うつらうつらと眠る彼を見つめる少女は、そっと小さな手を白人男の頬に差し伸べた。

「…う」

眠る男は不意の刺激に飛び起きた。

少女の手首を掴んだ男は一息に少女を押し倒す。

「…あ？」

「寝ぼけてんじゃないわよ、ボケなす」

屈強な男に引き倒された彼女は顔の両脇に手首を固定されたまま男をにらみつけた。

「君は…」

自分が押し倒した相手が昨晚、傭兵らしい男が守って眠っていた少女だと気がつく。

「すまん…」

ため息をついた彼は少女の手を離すと、エレーネと呼ばれた少女は息をついてから起き上がってドレスの裾をはたいた。

「おいていつでもよかったんだけど」

さすがに同業者にそれもないでしょ、と彼女は言ってジョージの差しだしたカバンを肩にかけた。

「行くわよ」

言い捨てて歩きだす。

彼女を守っていた男も、同業らしい傭兵の白人男に顎をしゃくると彼女に続いて歩きだした。

足の小さな子供用の特注のブーツ。

彼女のためにあつらえられたものだろう。

どんなに軽装であってもさすがに足元だけは軽装ではいられない。すたすたと乾燥地帯を歩く彼女の無防備な様子に、後ろについて歩く男は何とも思わないらしい。そんなことに疑問の一つも感じながら同業者だという男は彼女に声をかける。

「で、結局、どうして俺が味方だと？」

「目を見ればわかるわよ」

肩をすくめた彼女は日差しの暑さに眉をひそめた。

「今回の作戦の内容、聞いているか？」

「あんたの任務はなんなのよ」

ぞんざいに尋ね返しながら、彼女は肩越しに視線を向ける。

不思議な少女。

戦争地帯にいるというのに、少女の余裕が信じられない。

「君の名前は？」

「エレーネって呼ばれてる」

「：嘘だろ？」

呆然とした男の声に、少女は思った。

「あんた傭兵にむいてないんじゃない？」

白けた眼差しで彼を見やる。

「俺は、ジョスリン：。あんたたちと合流して作戦に当たれって」

彼の任務はそれだった。

金色の短い髪をくしゃくしゃとかき回しながら少女を凝視している。

「そう：」

少女はそれだけ言うと自分たちの隣を走るジープに視線を止めた。

銃を肩に担いだ兵士たち。

顔を覆っているのはアラブ系だからだろう。

「止まれ！」

つたない英語で命令された。

彼女は正直に止まると、彼女に従うように歩いていたジョージも足を止める。当然の成り行きで、ジョスリンと名乗った男も足を止める結果になった。

「：何者だ！」

「見たままよ」

威嚇するように尋ねられて、彼女は肩をすくめる。

相手は銃を帯びた兵士だというのにエレーネと名乗った少女は怯むどころか、肩を落とした。

男の腕が少女に伸びた。

子供だから、と油断した。

そのときのジョスリンにはわからなかったが結果的にそう言うことになった。

彼は腕を伸ばして彼女を引き寄せる。

小さな子供の体格など引き寄せることなど簡単だ。

彼女を捕らえ、男たちは殺せばいいとでも思ったのだろう。

その様子を見ているジョージは、しかし慌てない。

「おい、大丈夫か…？」

「しゃべるな！」

アラブ系の男に、少女は首の下を腕で捕らえられても少女は慌てる様子を見せなかった。

冷静に、事態を見極める。

「金髪のカギか、犯すにはちょうどいい…」

下卑た笑いにかすかに少女が眉をひそめた。

そのときだった。

少女の周りを閃光が走った。

熱の波が一気にあたりを包む。

彼女は瞳だけを翻してくりりと回った。

まるでモデルの少女が衣装を披露するような所作だ。

長い睫毛を伏せて彼女は踊るように踵で重心をとってゆっくりと

まわった。

次に彼女が目を開いた時、あたりは業火に包まれる。

火柱が上がった。

アラブ系の男たちも、車も巻き込んで燃え上がる。

「寝いて良かっただろう？」

ジョージは口元だけでにやりと笑った。

「そうね」

微笑した彼女は男に抱き寄せられて肩から力を抜いた。

背中をたたく彼の腕に、彼女は自分が燃やしたそれを見やると再び歩きだした。

「ジョス、わたしの任務はね、タリバンの中継基地をつぶすことなのよ」

彼女のその言葉に、ジョスリンは目を見開いた。

それがジョスと彼女の対面だった…。

一九八九年から始まったアフガニスタンでの内戦は未だに終結する気配も見せず、タリバンとアフガニスタン救国・民族イスラム統一戦線の争乱は一進一退を続けていた。

否、アルカイダと手を組んだタリバン勢力のほうが優勢だったといえるだろう。

その、タリバンとの戦いにかり出されたのが、雇われた私兵たちであったが、この私兵たちをもってすら、戦局に決定的な一打を与えることはできないままだった。

そんな泥沼にも似た戦場に、引きずり出されたのが、巨額の金銭で雇われたひとりの傭兵だった。

「暗号名は火の鳥」

傭兵としての名前。

火の鳥。

通称をエレネ。

かの者と合流し、作戦行動に当たれ。

それが彼に託された任務だった。

「あんたが、火の鳥…？」

こっちのごついのじゃなくて？

ジョスリンは驚いた顔でジョージ・リートとエレネを見比べた。まさか、「火の鳥」という暗号名を持つ傭兵が少女のほうだとは思わなかった。

思ってもいなかったが、たった今、見てしまったのだ。

少女の周りで炎がさざめくように渦巻くのを。

理屈ではなく、ジョスリンにはわかった。
理屈ではない。

そんなものは、戦場にあって意味などないのだ。

「…理屈じゃない、あんたが火の鳥か」

心の底から震えるような、圧倒的な彼女の存在感。

魂が、震えた…。

彼女が火の鳥なのだ、と…。

「わたしじゃないわよ、そんな名前つけるほど悪趣味じゃない」

肩をすくめた彼女はショルダーバックからショールを取り出すと頭にまいた。

照りつける日差しが苦しい。

「わたしに名前なんてない」

吐き捨てたエレーネは息をつくと視線を地面へとおろした。

とても彼女が屈指の傭兵には見えないが、それでもジョスリンはわかった。

無駄口きかずに彼女は歩く。

確実に、ゆっくりと。

「…帰りはどうするんだ？」

「どうとでもなるわよ」

短くつぶやいた彼女は、矢継ぎ早に問いかけるのはジョスリンで、彼はただ火の鳥と呼ばれる傭兵に問いかける。

そうだ。

昨晚、非力に男の腕の中で眠っていた少女とは思えない。

「歩いて基地までいくのか？」

「そのほうが都合がいいのよ」

都合が良い。

どういった意味だろうか、と彼は考える。

しかしそれを口に出さないのは、彼女が火の鳥だと知ったためだ。
火の鳥。

彼女なら信用できるのではないだろうか、と。

「まあ、足はそのうち考えればいいわ」
肩をすくめた。

「そのうちいやでも向こうからやってくる…」
低く、驚くほど冷ややかにつぶやいた彼女に、ジョージは眼差しだけを向けた。

無言のまま。

ジョスリンと合流してから七日ほどたった。

相変わらず徒歩で移動する彼らは、時折、通りすがりのように現れるタリバン兵を殺害しつつ進んでいた。

歩いては休み、そしてまた進む。

そんな移動の繰り返しだ。

砂漠の中は隠れ家がない。

だから、彼女はあえて隠れないのだ。

むこうから襲ってきたことを良いことに、彼女は着実にタリバンの戦力を削っていく。

それが数名でも、重い。

重く、沈殿する砂鉄のように、火の鳥と呼ばれる傭兵は彼らに重圧を与えている。

血の道を造る少女。

残酷な、火の鳥。

「もうすぐね、人が増えてきた…」

くすくすと笑う彼女に、ジョスリンはあきれかえった。

「本当に、砂漠の中を中央突破しやがった…」

彼女は恐れない。

手を広げ、まるで勝利の女神のように彼女は笑う。

明るい日差しの下で。

「大丈夫よ、心配いらない」

黄金の髪の毛、水色の瞳の。

白人の少女。

スキップでもするように軽やかに歩く彼女は地平線の向こうに瞳をやった。

「…そろそろ、本気でいきましょう」

歌うように告げた彼女は遠目に見える砂色の基地に目をすがめると、岩陰に隠れるようにして身を潜めた。

「でも、とりあえず休ませてちょうだい」

「何時間？」

ジョージが尋ねた。

「三時間でいい」

「了解」

腕時計に視線をやったジョージは腰に差した軍用ナイフと、銃を確認する。

肩に背負ったサブマシンガンを手で確かめて、彼は砂に埋もれるようにして少女を抱きしめると腰を下ろした。

エレーネは滑空するように眠りの谷へ落ちていく。

戦場で、いかに効率よく睡眠をとるか、彼も彼女もその方法を知っている。

ジョージの大きな胸に体を預けて眠ってしまった彼女に、ジョスリンは驚いたが、彼もまた思い直した。

そうだ、自分も彼ら同様に休息はとらなければならない。

彼らはジョスリンにも暗に告げたのだ。

三時間休め、と。

もつとも、ジョスリンとジョージは、エレーネのように熟睡する必要などない。

彼女と比べれば体力は充分すぎる。

彼女に体力がないのはその小さすぎる体格のためだ。

きっかり三時間たった。

「エレーネ」

呼びかける。

小さな体の少女は目を覚ました。

「目が覚めたか？」

「大丈夫」

彼女はしっかりとした表情で起き上がるとぱたぱたと手を払って、シヨールを頭から外した。

丸めてカバンに放り込む。

「さあ、カーニバルの始まりよ」

艶然と少女が笑った。

誰もが見とれるような艶やかな笑顔だ。

特別あつらえのブーツとチロルドレスという奇妙な出で立ちの少女は、背筋をまっすぐに伸ばして、基地へとまっすぐ歩いて行く。

彼女の背中を男たちは追わない。

誰も、彼女が刺客とは思わないからだ。屈強な男二人はどこからどう見ても傭兵で良的にされる。

見張りの兵士たちは銃を構えたままで訝しげに少女を見ている。

奇妙な出で立ちではあるが、文句のない美少女にどう反応して良いのかわからないのだろう。

地雷原の手前でエレーネが立ち止まった。

「…大丈夫なのか？」

少女がたったひとりで、どうやって地雷原を突破するのか。

「おまえ、エレーネがどうして火の鳥って名付けられたか知っているか？」

「…」

知るわけがない。

知らないが、それでもジョージの驚くほど冷静な眼差しになにか嫌な予感がすることだけは確かだ。

なにをするのか、と。

誰もが息をひそめて少女を見守っていた。

たったひとりで少女がなにかできるわけもない。

タリバンの兵士たちは誰もがそう思った。

まぶしそうに頭上の太陽を見上げた彼女は傾きかけたそれに口元

で微笑する。

腹の前で両手の指を組んだ。

それと同時に爆発音がとどろいた。

目を伏せた彼女の目の前で火柱が上がった。

「馬っ鹿じゃないの？ わたし相手に地雷原なんてきくわけじゃないじゃない」

砂や岩でさえ燃やせる彼女だ。

地面の下の爆薬が埋まってるなら、これほど好都合なことはない、

「行くぞ、ジョスリン」

ジョージは時間を計ったように顎をしゃくった。

走って彼女を追いかける。

先陣を切るのは火の鳥だ。

彼女でなければ突破口は開けない。

「あんた、火の鳥のなんなんだ？」

「お休み用お守りだよ」

ジョージは、金髪の男に問いかけられて肩をすくめた。

彼女が眠る時間を守るだけの存在だと、彼は言う。

火の鳥は強敵だ。基地をひとつ吹き飛ばすのに重火器も航空機もミサイルもいらない。

アメリカ政府お墨付きの腕利きの傭兵。

彼女が歩くだけで周囲には火の手が上がる。全てを飲み込む大爆発だ。地面が揺れ、そして地の底から燃え上がる。

永遠を生き、炎の中から再生する火の鳥。

「あの子にとって、車も戦車も、ミサイルも、全部体の良い燃料だ」
彼は笑った。

「エレーネ」

「その名前は嫌いよ」

目線をぐると基地へ回す。

彼女は目の前に展開するタリバン兵士らの一斉射撃を鼻で笑うと地面にかがみ、両手をついた。

なにかの儀式でもするかのように。

「あれだけの数、ひとりずつなんてやってられないわ」

天地がひっくり返ったようだと、ジョスリンは思った。

地面の下からまるで壁のような炎が吹き出したのだ。

目を閉じて、彼女は射程を見極める。

「無理するな…」

「うるさいわね」

ジョージの忠告に、エレーネは意識を研ぎ澄ました。

意識が、精神が。

焼き切れそうな緊張に、少女は叫び声を上げた。

それとほぼ同時に、地面が咆哮する。

大地が、鳴く。

「エレーネ！」

ジョージが彼女を呼ぶ。

長い、長い絶叫。

体の底から放たれるような叫びに、炎が竜となる。

基地も、人も、大地もなにもかも飲み込んで燃やし尽くす。頭を

抱えて叫び声を上げる彼女に、灰色の髪の毛の男は少女を抱きしめた。

彼女自身の精神の限界まで。

火の鳥、と呼ばれる少女の炎に誘われるように、炎は可燃物を巻

き込んで誘爆する。

炎の中心で、彼女は目を開いた。

ふらりと歩きだす。しかし、数歩歩いたエレーネは力尽きたよう

に膝をついてそのまま地面に上半身が倒れた。

まるで枯れ木の枝のように。

広大な基地を燃やし尽くし、彼女は目を開いたまま砂の上に倒れ

ていた。

誰かの存在を探すかのように、エレーネの指先がかすかに動く。

「エレーネ…」

駆け寄って抱き上げたのはジョージ・リートだ。

その胸に、そつと頭を預けた少女は今度こそ本当に目を閉じた。
「…終わり」

どこからか、ばらばらとヘリコプターのプロペラが回る音が聞こえた。

彼女の仕事を監視していたのだろう。

もつとも、自前の軍隊を投入して基地をつぶすならばヘリコプターだけではすまなかったはずで、監視につけるくらいであれば損失はほぼ皆無だ。

街への帰還はどうとでもなる、という彼女の台詞を思い出してジョスリンは肩を落とした。

結局の所、彼女が任務を行うためにジョスリンは護衛として雇われたのだということを実感する。

「すごい子だな」

前髪をかき上げた彼は大男の腕の中で意識を失っている少女を見つめてため息をついた。

それが、火の鳥と呼ばれる少女と、戦争屋のジョスリンの出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8332r/>

ククルカン

2011年4月5日18時55分発行